黒羽芭蕉の館だより③

このコーナーでは、毎月一回、黒羽芭蕉の館の催し物や収蔵・展示資料などについて紹介していきます。

松尾芭蕉の画像

松尾芭蕉（1644～94）のおもかげを伝えるものとしては、画像や木像・塑像・陶像があります。俳諧の世界における芭蕉は、すでに江戸時代から偶像的な存在となっていたので、芭蕉を描き象った画像・木像などは多数つくられました。ただし、そのほとんどについては、芭蕉の死後に制作されたものです。

そうした中にあって、「奥の細道行脚之図」は、門人の森川許六が元禄6年（1693）春に芭蕉と曾良の『おくのほそ道』の旅姿を描いた作品なのです。つまり芭蕉の生前に門人によって描かれた芭蕉および曾良の画像で、二人の真の姿に迫る肖像画ということができます。

奥の細道行脚之図（レプリカ）

森川許六（1656～1715）は彦根藩士で、名は百仲、通称五助といいました。許六は俳号です。彼ははじめ絵画を狩野派に学び、漢詩に親しんでいましたが、元禄2年（1689）ごろから蕉門に接近します。元禄5年秋、官命により江戸に下った際に芭蕉と対面し、師弟の契りを結ぶところとなり、翌年夏まで俳諧の指導を受けることになります。本作品は、まさに許六が江戸に滞在して、芭蕉に接していた時に描かれた迫真の肖像画なのです。

本作品に描かれる芭蕉は、茶人帽や宗匠帽とも呼ばれる黒い頭巾をかぶり、法体姿で草鞋をはき、笠を手にして、杖をついています。大きな耳とふくよかな頬の肉付きが印象的です。

芭蕉の後ろに描かれる曾良は、芭蕉より5歳年下で、『おくのほそ道』の旅に随行したことで有名です。芭蕉同様法体姿で、笠をかぶり、頭陀袋と包みを振り分けに肩にしています。

本作品の原本は、天理図書館（奈良県）に所蔵されており、黒羽芭蕉の館の芭蕉展示室では、そのレプリカ（複製）を展示しています。（ただし、3月11日の東日本大震災の影響により、4月15日現在、当館は休館状態となっています。）

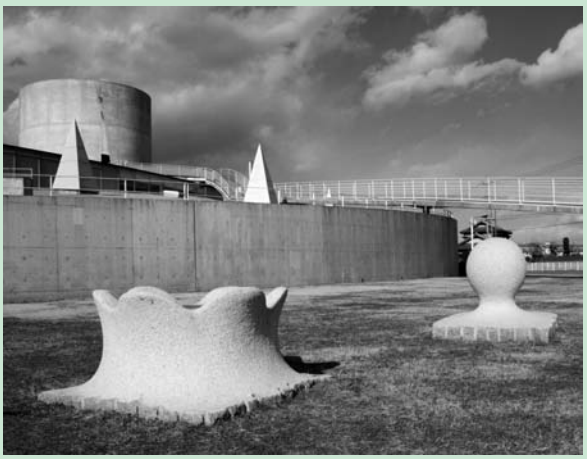
■問い合わせ
黒羽芭蕉の館　TEL（54）4151

彫刻周遊⑧

市内で作られた作品とその作者

このコーナーは、「那須野が原国際彫刻シンポジウム」で公開制作、設置された作品とその作者を連載で紹介します。

那須野が原ハーモニーホールの南側にある芝生広場のほぼ中央に、白い球体と王冠のような形をした1組の彫刻作品があります。それはまた、水滴が水面に落ちる瞬間を超高速で撮影したような作品にも見えます。



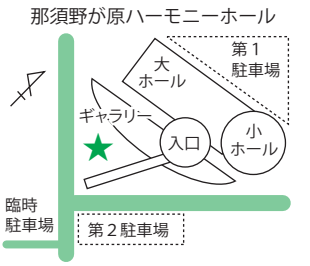
如（にょ）　大成　哲（東京都）2009年

大成　哲 氏

作者は、「一滴の滴が落ちた様」、すなわち王冠あるいは花弁のように広がった姿を「何かが終わった、無くなったもの」とし、また、「水の波紋から突き出る一滴」、すなわち球体が飛び出すような姿は「何かが始まる、生まれるもの」として表現しようと試みたと言います。

作者は大成哲氏。東京都生まれで、日本大学芸術学部美術学科を卒業後、チェコ共和国に政府国費留学となり、その後東京藝術大学大学院を卒業。日本のみならずルーマニア、チェコ、ドイツ、オーストリアなど世界各地で活動しています。また、制作の幅も石彫や木彫をはじめ、ガラス、フィルムなど多岐にわたっており、精力的に創作活動を行っています。

設置場所案内図（★印）



■問い合わせ
文化振興課文化振興係　TEL（23）8718